

## 日本語受動文の統語構造再考(3)

著者	加賀 信広
雑誌名	文藝言語研究
巻	72
ページ	67-82
発行年	2017-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00148417">http://hdl.handle.net/2241/00148417</a>

## 日本語受動文の統語構造再考 (3)

加 賀 信 広

### 1. はじめに

本論では、日本語間接受動文に対して新たな統語分析を提案する。すでに概観したように、日本語受動文の統語分析としては、直接受動文と間接受動文に共通の複文構造を仮定する同一構造説と、間接受動文には複文構造を仮定するのに対して、直接受動文の派生には移動操作を認め、単文の構造を仮定する非同一構造説の2つが存在している。たとえば (1a) の直接受動文と (1b) の間接受動文に対して、同一構造説と非同一構造説はそれぞれ、(2a, b) と (3a, b) の構造を与えることになる。

- (1) a. 太郎が先生にほめられた。  
 b. 太郎が花子に泣かれた。
- (2) a. 太郎が [ <sub>S</sub> 先生(が) 太郎(を) ほめる ] ーられた  
 b. 太郎が [ <sub>S</sub> 花子(が) 泣く ] ーられた
- (3) a. 太郎<sub>i</sub>が 先生に <sub>t<sub>i</sub></sub> ほめーられた  
 b. 太郎が [ <sub>S</sub> 花子(が) 泣く ] ーられた

同一構造説が (2) のような基底構造を仮定するということは、すなわち、受動のラレは受動文の主動詞であり、その主動詞としてのラレが「受影者 (affectee)」項と「イベント」項をとるのが日本語二受動文であると主張していることになる。この考え方の下では、直接受動文と間接受動文の違いは、前者にのみ同一名詞句削除 (equi-NP deletion) が適用するという点だけである。Kuroda (1979) に代表されるこの説は、影響を受ける要素、つまり「受影者」だけが二受動文の主語に現れうるという事実を自然な形で説明できるところに強みをもつ。

一方、McCawley (1972) や Kuno (1973) などで提案された非同一構造説は、(3) にみるように直接受動文と間接受動文に異なる構造を仮定するので、

2種類の異なる受動のラレを認めることになる。すなわち、間接受動文のラレは同一構造説と同様に、「受影者」項と「イベント」項をとる主動詞としてのラレであるのに対して、直接受動文のラレは英語の受動分詞-enなどと平行的に、接辞として動詞に付加し、動詞の項構造に影響を与える要素であるとみることになる。したがって、非同一構造説では、ラレの語彙的統一性が放棄されていることに注意したい。他方、この説の強みは、主語指向性をもつとされる「自分」に関する事実が容易に説明できるという点にある。Kuno (1973) 等で指摘されているように、直接受動文と間接受動文では、旧主語の～ニ句が「自分」の先行詞になれるか否かではっきりとした違いが観察される。(4) にみるように、間接受動文では可能であるが、直接受動文では不可能である。

- (4) a. 太郎<sub>i</sub>が先生<sub>j</sub>に自分<sub>i/j</sub>の部屋でほめられた。  
 b. 太郎<sub>i</sub>が花子<sub>j</sub>に自分<sub>i/j</sub>の部屋で泣かれた。

非同一構造説の下では、単文構造の(4a)において「先生」が主語のステータスをもたないのに対して、複文構造をもつ(4b)の「花子」は従属節の主語と認定されるために、上記の相違の自然な説明が可能となる。一方、同一構造説では、この「自分」に関する事実を説明するのは、加賀(2016)で指摘したように、かなり難しい課題となる。このように、同一構造説と非同一構造説は、それぞれが強みをもつと同時に、課題も残されている。

## 2. 新たな提案——間接受動文の構造

加賀(2017b)は、日本語の受動文を次のような過程により派生することを提案した。

- (5) 日本語の受動文は、基底生成された構造に次の3つの操作が適用することで派生される。  
 a. 受動接辞ラレが導入される。  
 b. 名詞句が上方移動する。  
 c. 格付与が行われる。 (加賀 2017b : 151)

たとえば(6)の直接受動文は、(7a)の基底の構造にこの3つの操作が適用

して、(7b) の構造が派生することで得られることになる。なお、(5c) の格付与については、やはり加賀 (2017b) で提案された (8) の手順を仮定する。

- (6) 太郎が先生に賞を与えられた。  
 (7) a. 先生 太郎 賞 与えた<sup>1</sup>  
 b. 太郎<sub>i</sub>ガ 先生ニ e<sub>i</sub> 賞ヲ 与えーられた  
 (8) 動詞句の領域において、  
 i. 動詞の語彙特性に基づき、当該名詞句に語彙格・内在格を与えよ。  
 ii. 指示性をもつ最上位の項にガ格を与えよ。  
 iii. 指示性をもつ最下位の項にヲ格を与えよ。  
 iv. 残りの名詞句にニ格を与えよ。ただし、すでに同一領域で「ニ」が付与された場合を除く。 (加賀 2017b : 148)

(7b) では、「太郎」が「先生」を越えて上方移動し、最上位項のステータスを得て、(8ii) によりガ格を付与される。「賞」は最下位の項であるため、(8iii) に従ってヲ格をもらい、最後に「先生」が非該当条件である (8iv) によってニ格を得るという派生になる。

この受動文の派生手順は、間接受動文にも同様に適用できると考えられる。すなわち本論では、たとえば (1b) の間接受動文は次のような手順により派生されると提案する。

- (9) 太郎が花子に泣かれた。(= (1b))  
 (10) a. 花子<sub>i</sub> 太郎 [ PRO<sub>i</sub> 泣く ] V  
 b. 太郎<sub>i</sub>ガ 花子<sub>j</sub>ニ e<sub>i</sub> [ PRO<sub>j</sub> 泣く ] Vーられた

(10a) が基底の構造になると考えたい。ここには、空の動詞 (empty verb) が存在しており、無標の行為動詞「する」に相当する意味内容をもつと仮定する。空の動詞が音形をもたないまま (10a) に格付与が行われると、「花子が太郎に泣いた」という容認性の低い能動文になるが、意味としては「花子が太郎に(対して)泣く(という)ことをした」ほどの解釈が与えられると考える。つまり、(10a) は空の動詞 V が主動詞となり、「花子」が作用主、「太郎」が被作用主、[ PRO<sub>i</sub> 泣く ] の節がその作用の内容をそれぞれ表している、三項の

文構造をもつと仮定する。この基底の構造に、(5)の受動操作が適用すると、(10b)の構造が得られる。空の動詞に受動接辞のラレが付加し、「太郎」が上方移動し、格付与が行われるという手順である。ここで1つ注意すべきこととして、(10a, b)の格付与では、[PRO<sub>i</sub> 泣く]という節が最下位の項となっており、この要素が音韻・形態的にヲ格を実際に具現することはないものの、理論的には(8iii)によりヲ格を与えられると考えるという点がある。この抽象的なヲ格の付与があるために、(10b)の「花子」は、非該当的規則の(8iv)に該当することになり、その結果として二格を得ることができるとはならない(加賀2017aを参照)。

ここで提案された間接受動文の分析は、要点をまとめると次の3点となる。i) 基底構造に空の動詞が含まれる、ii) 受動のラレは空の動詞に接辞付加される、iii) 間接受動文の派生にも移動操作がかかる。さらに、間接受動文に対するこの提案を、直接受動文を含めて整理をすると、次のようになる。

- (11) a. 直接受動文と間接受動文は、基本的に平行する構造と派生プロセスを有する。
- b. 直接受動文と間接受動文の相違は、後者では第3項に節要素が生じ、空の動詞が含まれる点である。
- c. 受動のラレは、動詞接辞であり、動詞がもつ項の階層関係を変更させる機能だけをもつ。

(11a)は、本論での提案では、直接受動文も間接受動文も能動文に対応する基底の構造から、ラレの付加と項の上方移動という同一のプロセスで派生されるということをもとめたものである。(11b)は、直接受動文と間接受動文の違いに関するもので、間接受動文では第3項が節要素となるため、その中に動詞が現れることになるが、文としての主動詞はその動詞ではなく、空の動詞が仮定されていることを述べている。その結果、受動のラレは、(11c)で述べられているように、直接受動文でも間接受動文でも動詞接辞として働き、付加される動詞の項構造に影響を与えるという機能を果たすと見なされることになる。

このようにまとめられた本論の提案は、これまでの同一構造説とも非同義構造説とも異なる内容をもつことに注意したい。同一構造説は、直接受動文と間接受動文の両方に複文構造を与えるが、本論の分析では、複文構造になるのは間接受動文だけである。さらに、われわれの分析における間接受動文の複文構

造は、基底の構造の第3項に節要素が生じたということであり、受動のラレがイベント項を選択すると考える同一構造説とは、この点でも異なっている。また、同一構造説は、受動のラレがいわば主動詞であり、受影者項とイベント項をとると考えるが、本分析では、ラレはいずれも動詞の接辞とみなされるので、この点でも異なっていることになる。一方、われわれの分析は、非同一構造説と直接受動文の派生に関しては共通しているが、間接受動文の派生についてはやはり異なっている。われわれの分析は、空の動詞を立てることにより、能動文に対応する基底構造を仮定して、直接受動文と同様に、間接受動文の派生にも移動操作を認めるのである。このように、本論の分析は、同一構造説とも非同一構造説とも異なっている。敢えていえば、直接受動文の分析において共通している非同一構造説に近いとも考えられるが、(11a)で述べられたように、直接受動文と間接受動文に平行する構造と派生プロセスを仮定する点で、非同一構造説の精神とは相容れないものがあり、非同一構造説の一変種と考えるのは適切でないと思われる。

受動のラレについて、もう少し掘り下げて考えてみよう。同一構造説は受動文のラレを主動詞と分析し、非同一構造説も間接受動文においてはラレを主動詞と分析するが、われわれの分析はこれを常に動詞に付加する接辞と考えている。この点が先行研究とわれわれの分析との大きな相違点である。よく知られているように、ラレには受動の他に、自発や可能の用法もある。<sup>2</sup> 次のような文である。

- (12) a. 昔のことが思い出される。(自発)  
 b. あの人だけが信じられる。(可能)

ラレに複数の用法があるというのは、使役のサセがほぼ使役の意味用法に限定されているのとは対照的である。

- (13) a. 捕手が投手に直球を投げさせた。  
 b. 母親が赤ん坊を寝させた。

(13a, b)の例において、サセは「投手が直球を投げる」「赤ん坊が寝る」などの基の文に、「捕手」「母親」という使役主を導入する役割をになっていると考えられる。サセが主動詞であるか、助動詞であるかの統語分析は措くとして

も、サセに使役主導入の責任があることは確かである。したがって、サセの機能は文に新たな使役主を導入するということにあり、そして、その機能のためにサセはほぼ使役用法に限定されてしまうと考えられる。

これに対して、ラレはどうであろうか。同一構造説で仮定されたように、受動のラレに「受影者」を導入するという役割があるとすると、ラレの機能は「受影者」の導入に固定されることになり、他の用法をもつことはないと予測することになる。少なくとも、サセと平行的に考えるのであれば、そのような予測をすることになるが、事実はそうではなく、ラレには複数の用法が開かれている。一方、ラレは動詞の接辞、すなわち助動詞であり、付加される動詞の項の階層関係に影響をもたらす機能をもつという考え方の下では、ラレが複数の用法をもつという事実とも矛盾しない分析が可能であると考えられる。つまり、(12a, b) の自発用法と可能用法の基には、(14) のような構造があり、この構造に動詞接辞としてのラレが加わることで、項の階層関係に変化が生じて、「昔のこと」と「あの人だけ」がガ格を得ることになり、その結果、(12) のようなラレル文が得られると考えるのである。

- (14) a. (私ガ) 昔のこと(ヲ) 思い出す。  
 b. (私ガ) あの人だけ(ヲ) 信じる。

ラレル文の統一的な分析については、稿を改めて念入りな議論を行う必要があるが、受動のラレに対して「受影者」なりの特定の意味役割を導入する機能を認める分析よりは、本論のように、動詞の接辞とみなし、項の階層関係に変更を加える機能をもつと考える方が、ラレル文の統一的な分析が容易になるというのは間違いがないと思われる。<sup>3</sup>

本論で提案している受動文の分析では、直接受動文と間接受動文が基本的に平行する構造と派生プロセスをもつことになるが、「自分」の束縛に関する事実は適切に説明ができることを確認しておきたい。前節の(4)で観察したように、直接受動文では旧主語の～ニ要素が「自分」の先行詞にならないが、間接受動文ではそれが可能である。この違いは、われわれの分析では次のように捉えられる。

- (15) a. 太郎<sub>i</sub>が 先生<sub>j</sub>に e<sub>i</sub> 自分<sub>i/7j</sub>の部屋で ほめーられた  
 b. 太郎<sub>i</sub>が 花子<sub>j</sub>に e<sub>i</sub> [ PRO<sub>j</sub> 自分<sub>i/7j</sub>の部屋で 泣く ] Vーられた

(15a) の直接受動文では、上方移動した「太郎」だけが主語のステータスをもつものに対して、(15b) の間接受動文では、上方移動した「太郎」に加えて、第3項を占める節に生じて、「花子」を先行詞とするPROも主語であるために、「自分」は「花子」の読みで解釈することも可能になるのである。

本論が提案する受動文の分析に対して、問題点を挙げるとすれば、間接受動文の基底にある構造に空の動詞を仮定する点ではないかと思われる。すなわち、(10a) (以下に再掲) の構造であるが、主動詞として音形をもたないVを置き、「太郎が花子に泣く (という) ことをする」ほどの意味内容を有すると仮定した点である。

(10) a. 花子<sub>i</sub> 太郎 [ PRO<sub>i</sub> 泣く ] V

すでに述べたように、この基底の構造が格付与を受けて、能動文として具現化した文は、容認性がかなり落ちる。

(16) ??花子が太郎に泣いた。

(10a) のような構造を仮定することにそもそも妥当性があるのかという点について考察しておく必要があると思われる。まず、(16) の文が容認性の落ちる文になる理由について考えてみる。この文は、作用主である「花子」が被作用主である「太郎」に「泣く」という作用を及ぼすという事態を表すことが想定されているが、主動詞が音形をもたないために、この文では、主動詞の存在を読み取ることができず、作用主と被作用主の関係を構築することが難しくなっている。「花子」は「泣く」行為の主体であると解釈するとしても、「太郎に」の文中における位置付けが宙に浮いたままになってしまい、適切な意味解釈を施すことが難しい文となっている。

ここで、「～てあげる」文と「～てもらう」文について考えてみよう。次のような文である。

- (17) a. 花子が太郎に泣いてあげた。  
b. 太郎が花子に泣いてもらった。

これらの文は、文意をかみくだと、おおよそ「花子が太郎に泣く (という)



ことをしてあげた」「太郎が花子に泣く（という）ことをしてもらった」と解釈することができる。「してあげる」「してもらう」という表現から伺うことができるように、「－あげる」「－もらう」という補助動詞は、(17a, b)において「泣く」という動詞に直接接続しているのではなく、「する」に相当する動詞があり、その動詞と結びついていると考えることができる。そうであるとすると、われわれの本論での分析においては、(17a, b)には次のような構造が与えられることになる。

- (18) a. 花子<sub>i</sub>が 太郎に [ PRO<sub>i</sub> 泣く ] V－てあげた  
 b. 太郎<sub>i</sub>が 花子<sub>j</sub>に e<sub>i</sub> [ PRO<sub>j</sub> 泣く ] V－てもらった<sup>4</sup>

補助動詞は空の動詞に後接していると考えられるが、その場合には (17a, b) のように容認できる文が得られている。そうすると、(10a) の基底の構造については、次のように考えることができそうである。空の動詞が単独で生じて、主動詞の存在が確認できないような環境では、文の容認性がかなり落ちることもあるが、「－あげる」や「－もらう」などの補助動詞や助動詞のラレが生起して、それらの動詞接続要素から主動詞の存在が復元できる環境では、適切な解釈を与えることが可能となり、文法的な文が得られるのである。このように考えると、(10a) における空動詞の仮定に一定の妥当性を認めてもよいと思われる。

本論で提案された分析でもう一つ考えておくべきこととして、被害受身の1つの典型例としてしばしば引き合いに出される「太郎が雨に降られた」などの受動文をどのように派生するかの問題がある。「雨」のような自然現象を「花子」のような有生の存在と同列に扱ってよいかという問題である。結論を述べると、同列に扱ってよいと思われる。すなわち、(19a) の基底構造があり、そこに受動操作が加わることで、(19b) の構造をもつ間接受動文が派生されると考えられる。

- (19) a. 雨<sub>i</sub>(ガ) 太郎(ニ) [ PRO<sub>i</sub> 降る ] V  
 b. 太郎<sub>i</sub>ガ 雨<sub>j</sub>ニ e<sub>i</sub> [ PRO<sub>j</sub> 降る ] V－られる

(19a) の基底の構造は、「雨が太郎に降る（という）ことをする」という意味を有すると考えられるが、自然現象が作用主になり、被作用主になんらかの影

響を与えることは十分に想定できることであり、(19a) を仮定することに特段の不自然さはないと思われる。その一つの証拠として、(20a) の補助動詞を伴わない能動文はやはり容認性が落ちるものの、(20b, c) のような「～てくれる」文や「～てもらおう」文は容認できると思われる。われわれの分析では、(19a) の基底構造に「～くれる」「～もらう」が後続している文と考えられるが、空の動詞を主動詞とする構造を仮定する1つの根拠になるとと思われる。

- (20) a. ??雨が太郎に降った。  
 b. その日、久しぶりの雨が水不足に苦しむ農民に降ってくれた。<sup>5</sup>  
 c. 水不足に苦しむ農民は久しぶりに雨に降ってもらって、喜んだ。

### 3. 間接受動文の被害性の起源について

われわれは、日本語間接受動文に対して (21a) の基底構造を仮定し、受動化操作により (21b) の構造を派生することを提案した。

- (21) a. 作用主<sub>i</sub>(ガ) 被作用主(ニ) [ PRO<sub>i</sub> ... V ] V<sub>empty</sub>  
 b. 被作用主<sub>i</sub>ガ 作用主<sub>j</sub>ニ e<sub>i</sub> [ PRO<sub>j</sub> ... V ] V<sub>empty</sub> ーられる

この提案は、従来の同一構造説とも非同構造説とも異なる新たな分析であるといえるが、この構造を仮定すると、日本語間接受動文がもつ被害の意味について、なぜ間接受動文が常にそのような含意をもつのかを説明する手掛かりが得られると思われる。その手掛かりは、(21a) の基底の構造にある。この構造は空の主動詞を含むが、その動詞は、行為を表す無標の動詞「する」に相当する内容をもつと仮定した。そうすると、(21a) は「作用主が被作用主に V ということをする」ほどの意味になるが、この場合の被作用主の意味的役割を考えると、それは「受害者」になるとと思われる。<sup>6</sup> 具体例で示せば、(22a) のような文である。

- (22) a. 花子が太郎に [ 泣く (という) こと ] をした。  
 b. 花子が太郎に [ 泣く (という) こと ] をしてあげた。  
 c. 花子が太郎のために [ 泣く (という) こと ] をした。

(22a) は、(21a) の構造に語彙を挿入し、格を付与したものであるが、この文と (22b) の「～てあげる」文や被作用主に「～のために」という表現が追加されている (22c) を比べてみると、(22a) の「太郎」は「花子」から疎外された扱いを受けているという感覚がある。(22b) や (22c) では、「太郎」はヒトとしての扱いを受け、「太郎」の意志が曲がりなりにも尊重されているという状況が読み取れるが、(22a) の「太郎」はいわばモノ扱いされ、その意志は尊重されず、人格を認められていないかのような感覚がある。(22a) では、花子の泣くという行為は少なくとも太郎にとっては嬉しいことではなく、逆に、困ったこと、良からぬことという解釈が強い。(22b, c) の「太郎」を<受益者>と呼ぶとすると、(22a) の「太郎」は<受害者>と呼ぶのが適切であると考えられる。

(21a) の被作用主が<受害者>と特徴付けられるとすると、間接受動文の (21b) は、その<受害者>が主語になる構文である。主語は、話し手の視点、すなわち、事態の記述者としての視点をもっとも置きやすい要素であるという意味で、文は主語寄りの視点からの記述になるのが一般的であると言われる。したがって、<受害者>が主語となる受動文は、<受害者>が非主語である基底の構造に比べて、「受害」の意味が増幅され、これがいわゆる被害・迷惑の受身文になると考えられる。被害・迷惑の意味はこれまで受動文において観察されるものと一般的にみなされてきたが、ここでは、被害の意味の起源は能動文に対応する基底の構造にすでにあると考えることになる。(22b) のように補助動詞「あげる」が付加されたり、(22c) のように独自の意味をもつ複合後置詞「ために」が導入されたりすれば、被作用主は「受益者」の解釈をもてることになるが、(21a) の構造において被作用主は<受害者>であり、受動のラレは前節でみたように、「項の階層関係を変更させる機能だけをもつ」動詞接辞であり、新たな意味役割を導入するなどの働きはもたないために、基底構造の<受害者>の役割が受動文でもそのまま引き継がれ、被害・迷惑の受身文が派生されると考えられる。ただし、この考え方が妥当であることを示すためには、まず (21a) の被作用主の<受害者>という特徴付けが本当に正しいかどうかを検証してみる必要がある。

(23) のような対話文を考えてみよう。子供を遊ばせるボランティアが来てくれた場面で、母親とボランティアの間で交わされた対話と考えてほしい。

(23) a. M: ボランティアさん、今日はうちの子供にどういうことをして

くれますか。

V: 今日 は 紙芝居 を しまし ょう。

- b. M: # ボランティア さん, 今日 は うち の 子供 に どうい う こ と を しまし ます か。

V: 今日 は 紙芝居 を しまし ょう。

(23a) は母親の発話として適切な質問となるが、(23b) の「うちの子供にどうい う こ と を しまし ます か」は、子供が暴行でも受けそうなニュアンスを伴ってしまう。(23b) の「子供」は<受害者>なり<被害者>なりの解釈をうけるのである。「(～ガ) ～ニ～ (こと) ヲする」という形式自体が、～ニ句に「受害」や「被害」の意味を生じさせていると考えなければならない。

次に、使役文について考えてみたい。(24a) の使役文は、様々な先行研究で指摘されているように、少なくとも「強制使役」と「許容使役」の2通りの読みを行うことができる (Shibatani 1976 など参照)。それぞれ、(24b) と (24c) で表現される読みである。

- (24) a. 花子は (息子の) 太郎に (大学に) 進学させた。  
 b. 花子は太郎を無理やり進学させた。 (強制使役)  
 c. 花子は太郎の進学を許した。 (許容使役)

ここで、(24a) に基づいて2つの分裂文を作ってみる。

- (25) a. 花子が太郎にさせたのは、進学することです。  
 b. 花子が太郎にしたのは、進学させることです。

(25a, b) の文を観察すると、(25a) は強制使役と許容使役の2通りの読みが可能であるのに対して、(25b) は強制使役の読みだけが可能であることに気がつく。(25b) には許容使役の読みはないのである。(25a) と (25b) の解釈の違いは、次のように説明できると思われる。まず使役文 (24a) は、(26) のように「使役主ガ 被使役主<sub>i</sub>ニ [PRO<sub>i</sub> ... V ] V<sub>empty</sub> ーさせる」という構造をもつと仮定する。

- (26) 花子ガ 太郎<sub>i</sub>ニ [ PRO<sub>i</sub> ... 進学す ] V<sub>empty</sub> ーさせた

(25a) の分裂文は、(26) の [ ] の部分が焦点位置に現れている文であり、(24a) の解釈のあいまい性がそのまま保たれることになる。一方、(25b) の分裂文の基になっているのは、(27) の構造である。

(27) 花子<sub>i</sub>ガ 太郎<sub>j</sub>ニ [ PRO<sub>i</sub> pro<sub>j</sub> [ PRO<sub>j</sub> 進学す ] V<sub>empty</sub> - させる ]  
V<sub>empty</sub> - した

ここでは、「花子<sub>i</sub>ガ 太郎<sub>j</sub>ニ [ PRO<sub>i</sub> ...V ] V<sub>empty</sub> - する」の構造の [ ] の内側にさらに使役文の構造が現れている。そして、外側の [ ] の部分が焦点位置に来ているのが、(25b) の分裂文ということになる。注意すべきは、(27) の「太郎」は pro<sub>j</sub> と同一指示となる要素として被使役主の解釈をうけるとともに、外側の「作用主<sub>i</sub>ガ 被作用主ニ [ PRO<sub>i</sub> ... V ] V<sub>empty</sub> - する」の構造から被作用主としての解釈もうけるという点である。この構造に現れる被作用主は、すでに見たように、人格が認められず、意志が尊重されないという意味で<受害者>の役割が与えられる。(25b) が強制使役の読みだけに限定されるというのは、このためであると考えられる。つまり、分裂文の前提部が「花子<sub>i</sub>ガ 太郎<sub>j</sub>ニ [ PRO<sub>i</sub>... ] V<sub>empty</sub> - した」という構造になっているために、「太郎」は<受害者>とみなされ、花子の行為は太郎にとって意に沿わないものという含意が出てくるのである。ここでの観察と議論が妥当なものであるとすると、(25b) の文の解釈が強制使役に限定されるという事実は、(21a) の被作用主要素が<受害者>と特徴付けられるとするわれわれの主張への説得力のある証拠になると考えられる。

ちなみに、(24a) の使役文を受動化すると、(28) の受動文となり、この文も強制使役の解釈だけをもつことが分かる (久野 1983 など参照)。

(28) 太郎は花子に進学させられた。

この文の派生は、次のようになると思われる。

(29) a. 花子<sub>i</sub>ガ 太郎<sub>j</sub>ニ [ PRO<sub>i</sub> pro<sub>j</sub> [PRO<sub>j</sub> 進学す] V<sub>empty</sub> - させる ] -  
V<sub>empty</sub>  
b. 太郎<sub>i</sub>ガ 花子<sub>j</sub>ニ e<sub>i</sub> [ PRO<sub>j</sub> pro<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> 進学す] V<sub>empty</sub> - させる ]  
V<sub>empty</sub> - られた

(29a) が基底の構造であり、(29b) が受動のラレが導入され、項の移動が生じた間接受動文の構造である。受動のラレは、助動詞サセに後接するのではなく、基底の構造に空の動詞が存在し、その動詞に付加すると考えられる。すなわち、「太郎が花子に進学させるということをした」という内容をもつことになり、「太郎」は<受害者>の役割をになうのである。

われわれのここでの主張は、(21a) の構造において被作用主要素は<受害者>と特徴付けられるというものであるが、それが妥当なものだと結論する前に、一つ考えておくべき問題がある。われわれは、(23b) や (25b) の例を基に当該の被作用主要素が<受害者>の役割が与えられることを議論したが、この構造の下ではその要素が常に<受害者>の解釈を与えられるかどうかを考えておく必要がある。問題となるのは、次のような例である。

- (30) a. 先生が太郎にほめる(ということ)をした。  
       b. 先生が太郎にしたのは、ほめる(ということ)だ。
- (31) a. 花子が太郎に時計をプレゼントする(ということ)をした。  
       b. 花子が太郎にしたのは、時計をプレゼントする(ということ)だ。

これらの例は、「～ガ～ニ [ ... V ] (ということ) をする」という形式を含んでおり、被作用主の～ニ句は<受害者>の役割をもつことが予測される。しかし、母語話者にこれらの例を示して、～ニ句が<受害者>の役割をもつかどうか、その意味がどの程度はっきりするかを尋ねてみると、<受害者>であるというはっきりとした判断は必ずしも返ってこない。分裂文で「先生／花子が太郎にしたのは」の部分に限っていえば、先生／花子が行ったのは太郎にとって何か不都合なことかもしれないという感覚はあるが、実際に焦点要素により、それが「ほめること」や「時計をプレゼントすること」であるという内容が与えられると、「太郎」は必ずしも<受害者>ではなく、<受益者>としての解釈もありうるという直観的判断が多くの母語話者から得られる。(30) や (31) の「太郎」は<受害者>ではないのであろうか。

この問題に関しては、次のように考えるべきであると思われる。「～ガ～ニ [ ... V ] (ということ) をする」という形式では、基本的に二格要素は「受害」の解釈が与えられるが、ただし、[ ... V ] の表す行為・出来事がある二格要素に直接働きかける性質のものであるときは、再解釈が行われ、二格要素が「中立的な受影」の解釈を受けることが可能になると考えられる。「先生が太郎に

ほめるということをする」というのは、すなわち「先生が太郎をほめる」ことであり、「花子が太郎に時計をプレゼントするということをした」というのは、「花子が太郎に時計をプレゼントした」ということである。この再解釈において、太郎は先生の「ほめる」という行為の、また、花子の「時計をプレゼントする」という行為の直接の〈受け手〉である。理論的に言えば、「先生が太郎をほめる」「花子が太郎に時計をプレゼントする」のように、単文構造に収まる内容であり、受動文としては、「太郎は先生にほめられた」「太郎は花子に時計をプレゼントされた」のように直接受動文が対応するのである。このように、再解釈を受けることができる場合は、形式としては「受害」の解釈を受けているにもかかわらず、いわば語用論的にそれがキャンセルされ、結果的に「中立的な受影」の解釈、あるいは、「受益」の解釈がもたらされると考えることができる。これに対して、単文構造に収まらない行為・出来事の場合は、再解釈を受けることがないので、形式に対応する「受害」の解釈がそのまま最終的な解釈になるのである。単文構造に収まらない行為・出来事とは、すなわち次のような場合である。

- (32) a. ??花子が太郎に泣いた。 ( = 16)  
 b. ??雨が太郎に降った。 ( = 20a)

(32a, b) は、前節の議論で (10a) および (19a) の基底の構造に対応する文として提出し、かなり容認性が落ちると判断したものであるが、単文構造としては全く可能性のない文である。この場合は、「花子が泣く」という行為、「雨が降る」という出来事の中に「太郎」が直接的に入り込むということはありません、あくまで「花子」と「雨」が作用主として、被作用主の「太郎」に影響をもたらすという関係であるため、「太郎」は被作用主として〈受害者〉の解釈を受けることになる。そして、その〈受害者〉の「太郎」が受動化により主語になると、被害・迷惑の含意をもつ間接受動文が出来上がるというわけである。

#### 4. おわりに

本論では、日本語間接受動文に対して新たな分析を提案し、その分析は、従来の同一構造説とも非同一致構造説とも異なる内容をもつことを示した。また、その新たな分析を踏まえると、間接受動文がなぜ被害・迷惑の意味をもつか

という長年の疑問に原理的に答えうる知見が得られることを指摘した。今後は、間接受動文の被害性や迷惑の含意について説明を試みてきた多くの先行研究との比較を通して、本論で提案した分析がどのような点で優れているかを明らかにしていくことが望まれる。

## 注

- 1 (7a) の基底の構造に格付与が行われると、「先生が太郎に賞を与えた」という能動文が得られることになる。なお、「太郎が花子に頭をなぐられた」のような、いわゆる所有受動文の場合は、基底の構造が「花子 太郎 頭 なぐった」のようになると仮定する。この構造に格付与が行われると、「花子が太郎を頭をなぐった」となり、完全に容認される文ではないが、これは音韻・形態 レベルで働く「二重ヲ格制約」のために、容認性が低下すると考えられる。詳しくは、加賀 (2017b) を参照。
- 2 ラレは他に「尊敬」の用法ももつが、ここでの議論からは除くことにする。
- 3 ラレル文の統一的分析をめぐる議論については、柴谷 (2000) などを参照のこと。
- 4 (18b) の「～てもらう」文では、「太郎」が被作用主で、「花子」が作用主であると仮定する。したがって、ここでは「太郎」の移動が生じていると考えられる。なお、動詞「あげる」を含む「花子が太郎にプレゼントをあげた」という文において、「花子」が<動作主>、「太郎」が<受取手>と分析されるのに対して、動詞「もらう」を含む「太郎が花子にプレゼントをもらった」という文では、「太郎」が<受取手>、「花子」が<動作主>と分析されるため、動詞の「もらう」に関しても、<受取手>の移動が起こると仮定することになる。つまり、補助動詞「～てもらう」の項に移動が生ずるのは、動詞「もらう」の特性を引き継いでいるからであると考えられる。
- 5 (20b) の文では、補助動詞として「～あげる」ではなく、「～くれる」が用いられている。これは、自然現象の「雨」からではなく、有生である「農民」の視点から状況を捉えた文にするためである。
- 6 「受害者」という用語は、宮腰 (2014a) から借用したもので、「受益者」との対比が意図されている。詳しくは、宮腰 (2014a) および宮腰 (2014b) を参照されたい。

## 参考文献

- 加賀信広 (2016) 「日本語受動文の統語構造再考(1)」『文藝言語研究 言語篇』69 巻, 59-82, 筑波大学。
- 加賀信広 (2017a) 「日本語二受動文における受影性の起源～意味役割理論と格配列理論からの帰結～」*JELS* 34, 56-62.
- 加賀信広 (2017b) 「日本語受動文の統語構造再考(2)」『文藝言語研究 言語篇』71 巻, 133-162, 筑波大学。



- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 久野 暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館, 東京.
- Kuroda, S.-Y. (1979) “On Japanese Passives,” Bedell, George, Eiichi Kobayashi, and Masatake Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 305-347, Kenkyusha, Tokyo.
- McCawley, Noriko Akatsuka (1972) “On the Treatment of Japanese Passives,” *CLS* 8, 256-270.
- 宮腰幸一 (2014a) 「受動文の受害性の起源について」『日本語文法』14: 1, 54-70.
- 宮腰幸一 (2014b) 「日本語ヴォイスの統合的・系列的多重構造：予備的考察」『論叢 現代語・現代文化』12号, 1-85, 筑波大学.
- Shibatani, Masayoshi (1976) “Causativization,” Shibatani, Masayoshi (ed.) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, 239-294, Academic Press, New York.
- 柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」『日本語の文法1 文の骨格』, 119-186, 岩波書店, 東京.